特約店限定特典

姉妹だけの秘密の夜

月明かりの差し込む、アルコーブベッド。

アーチ状にくりぬかれた秘密基地のような空間で、ふかふかのクッションを背にしたわたしとレダ姉様は向かい合って座っている。お揃いの寝着に、お揃いのナイトガウン。

わたし達の間には大きな木製トレイ。その上にはガラスポットとカップ、それから綺麗な焼き色のフィナンシェ。

姉妹だけの秘密のパーティー。準備は万端。

デルベルク侯爵家に着いたのは、午前の早い時間だった。

馬車を降りると待っていた侍女が日傘を差してくれる。その中に入りながら、家令の開けてくれた扉を潜った。

「おかえり、アンジェリカ」

出迎えてくれたのは、お父様とお母様と、レダ姉様。

わたしが帰ってきたことを喜んでくれているのが伝わってくる。それが嬉しくて、擽ったくて、胸の奥がぎゅっと切なくなってしまう。

「ただいま帰りました」

おかえりと、ただいま。

デルベルク家でこの言葉を交わすのは初めてではないのに、やっぱり嬉しい。

満たされなかった心の隙間が、埋まっていく感覚がする。目の奥が熱くなることを瞬きで誤魔化して、心のままに笑みを零した。

今日はデルベルク侯爵家にお泊まりだ。

レダ姉様と夜通しお喋りをする約束をしていて、姉妹だけの秘密のパーティーだと姉様は言っていた。デルベルクの家に泊まるとヴィクトル様に伝えたら「俺も行く」と言っていたけれど、スティーグ殿下が地方視察に行く日程と重なってしまったらしい。

このお泊まりと、地方視察。

どちらが先に決まっていた予定なのか……聞いてはいないけれど、ヴィクトル様からの愛情なのではないかと思っている。わたしが一人で過ごすことのないように、気を遣ってくれたのではないかと――

「――アンジェリカ？」

レダ姉様の声に、はっと顔を上げた。

少しぼんやりしていたようだ。なんでもないと、わたしは笑ってみせた。

「ヴィクトル様がいなくて寂しいのかしら」

姉様はガラス製のカップにアイスティーを注ぎながら、からかうようにクスクスと笑っている。考えていたことを見透かされているようで恥ずかしい。顔に熱が集まることを自覚しながら、差し出されたカップを両手で受け取った。

カップの持ち手には、ガラスでできた蝶が羽を休ませている。その羽をそっと撫でてからわたしはアイスティーを一口飲んだ。冷たい紅茶が頬の火照りを冷ましてくれて気持ちがいい。ふわりと桃の香りがした。

「寂しいというか……甘やかされているなって、そう思っただけ」

「あの人はアンジェリカを甘やかすのが好きなんだから、問題ないわよ」

そう笑ったレダ姉様はフィナンシェに手を伸ばす。それにつられるように、わたしもフィナンシェを一つ取った。

齧ってみるとナッツの芳醇な香りと優しい甘さが口いっぱいに広がって、思わず顔が綻んでしまった。バターをたっぷり使っているから指先に残る油分をナフキンで拭いてから、カップを手にしてアイスティーを飲んだ。

「このフィナンシェもヴィクトル様が作ったんでしょ？」

「ええ。姉様と夜通しお喋りをするって話したら、そのお供になるようにって作ってくれたんだけど……」

「この時間に食べるには背徳の味がするわね」

「確かに。作るのを見ていたんだけど、バターが……」

「言わないで。食べるのが恐ろしくなってしまうもの」

大袈裟に肩を竦める様子に、思わず笑ってしまった。

最近はフィナンシェが好きだと言ったから作ってくれたのだけど、次からはもう少し軽いおやつをおねだりした方がいいかもしれない。

ヴィクトル様が作ってくれたものを食べないという選択肢はないし、このフィナンシェもぺろりと食べてしまうんだろうけれど。

「これもアンジェリカ好みの味になるように調整しているんでしょうね」

「そう……かも？　最初に作ってくれた時よりもナッツの香りが強いかもしれないわ」

「凝り性だっていうのは知っていたつもりだけど、これはもうそういうのとは違うわね」

確かにヴィクトル様は凝り性だし、とっても器用だ。それはわたしの髪やお化粧をしてくれる時でも充分発揮してくれているけれど。そういうのとは違う？

どういう意味か分からなくて首を傾げると、レダ姉様は水色の瞳を悪戯に煌めかせている。くすりと笑みを零すと金の髪がさらりと揺れた。

「自分の作るものを、アンジェリカの好きなものにしたいのよ。このフィナンシェだってそう。自分のいない場所でも、自分の作ったものを食べて幸せになってほしいんだわ」

レダ姉様の言葉を胸の中で反芻して……わたしは顔が一気に赤くなったことを自覚した。

だってそんなの、愛されているってことでしょう？

「ふふ、アンジェリカも満更じゃなさそうね」

「……美味しいも楽しいも、嬉しいも。ヴィクトル様が教えてくれたんだもの。ヴィクトル様が側にいなくても、そういう気持ちになってほしいと願ってくれているなら……それはもう叶っているわ」

「あーあ、お熱いこと。いいわ、今夜はたっぷり惚気話を聞くって決めているんだから」

「そんな、惚気ってどういうものなのか……」

「惚気じゃなくてもいいんだけど、可愛い妹の幸せな話を聞きたいのよ」

レダ姉様がわたしを真っ直ぐ見つめている。その眼差しがあまりにも優しいから、胸の奥がぐっと熱くなる。

「いま、姉様と過ごすこの時間が幸せだわ」

心のままに、飾らない言葉がぽつりと零れた。

わたしの言葉に目を瞬いた姉様は、持っていたカップをトレイに置き、更にはそのトレイもサイドテーブルに置いてしまった。

どうしたのかと問う前に、レダ姉様が距離を詰めてくる。そのままわたしに抱き着くと、その衝撃で二人ともベッドに倒れこんでいた。

「あたしも幸せ」

顔横でレダ姉様が嬉しそうに笑う。わたしも一緒になって笑いながら、姉様のことをぎゅっと抱き返した。

姉妹の夜は、まだこれから。

話したいことも、聞きたいこともたくさんあるのだから。

© 花散ここ／風濤社　NOT FOR SALE